

Title	児童の読書に関する考察
Sub Title	
Author	金子美和(Kaneko, Miwa) 河野, 宏和
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2000
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2000年度経営学 第1588号 不可
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002000-1588

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文要旨

所属ゼミ	河野研究室	学籍番号	89828248	氏名	金子 美和
(論文題名)					
児童の読書に関する考察					
(内容の要旨) 昨今、子どもが読書をしなくなったといわれているが、確かに自分の長男やその友人を見ていても、あまり読書に親しんでいる様子は見受けられない。新聞社による読書調査でも、これまでやや改善傾向にあった子どもの読書量がここにきて急に落ち込んでいることが報告されている。当論文では、読書を能動性、積極性を養い、考察力、人間性を高める余暇活動ととらえ、子どもの読書の実態を調査し、それにもとづいて読書をすすめるための方策について考察を行う。また、乳幼児に対する読み聞かせを読書に大きな影響を与えるものととらえ、読書に対する影響と読み聞かせの実態も調査する。当論文は上記調査より、仮説を発見するための研究である。インタビュー結果より仮定を導き出し、その仮定をデータで確認し、その結果に基づき仮説を発見し、考察を行い、最後に児童をめぐる各主体別に提言を行っている。 当論文は8章から成る。最初に「1. 問題意識」、「2. 用語の定義」を記述したのち、「3. 児童書をめぐる状況」で児童の読書の実態および供給主体を中心とした児童書の状況を、既存データに基づき記述する。「4. インタビューとその結果、問題意識の修正」では、仮定の設定のために行ったインタビューの内容をまとめている。「5. 仮定の設定」では、インタビュー結果に基づき仮定を設定し、「6. アンケート結果」でその仮定を確認すべく実施したアンケートの結果を分析している。「7. 仮定の確認および結論」で、仮定が実際に該当するかについて結論を述べ、最後に「8. 今後への提言」で各主体に対し提言を行っている。 当論文において確認された主な内容を以下に要約する。 <ul style="list-style-type: none">本を好きになる・嫌いになるには、ある時期があり、その時期は小学校3年生である。3年生における働きかけが重要であるということが確認された。「変化の時期には、自分でおもしろい本を見つけて本を好きになる、読むようになる児童が多い。」ということが確認された。つまり、変化の主体は自分である。「変化の時期には、あるきっかけとなる本を自分で見つけることによって本を読むようになる、好きになる児童が多い」ということが確認された。かつ、そのきっかけとなる本は、「読解力にあった」「興味の対象にあった」本であり、この結果は主体が自分であるという結果と整合性がとれている。「児童の本好きと乳幼児期の読み聞かせは関係が高い」という仮定が確認された。「児童の本好きと外部環境要因とはあまり関係がない」という仮定が確認された。 乳幼児への読み聞かせに関しては、「本を好きな乳幼児は親が習慣として読み聞かせを行っている」という仮定が確認された。読み聞かせと親の本好きも関係があり、親の読書に対する姿勢が乳幼児の本好きに影響を与えていること、本に対する興味が始める時期は2、3歳であること等が確認された。 これらの確認結果に基づき、主となる主体（親、小学校、保育園）、従となる主体（公立図書館、書店、出版社）別に、児童の読書をすすめるための方策を最後に提言としてまとめている。					